

第 1 3 2 0 回 京都市教育委員会会議 会議録

1 日 時 平成 2 6 年 1 2 月 4 日 木曜日
開会 1 0 時 0 0 分 閉会 1 1 時 4 0 分

2 場 所 京都市役所内 教育委員室

3 出席委員 委 員 長 藤原 勝紀
委 員 星川 茂一
委 員 秋道 智彌
委 員 鈴木 晶子
委員・教育長 生田 義久

4 傍 聴 者 2 人

5 議事の概要

(1) 開会

1 0 時 0 0 分，委員長が開会を宣告。

(2) 前会会議録の承認

第 1 3 1 9 回京都市教育委員会会議の会議録について，全委員の承認が得られた。

(3) 議事の概要

ア 議事

報告 2 件

イ 報告事項

「新しい工業高校」の教育内容に係る検討状況等について

(事務局説明)

○三宅 新工業高校開設準備室長

現在，洛陽工業と伏見工業高校の統合・再編により，創設する「新しい工業高校」の平成 2 8 年 4 月開校に向け，鋭意準備を進めているところであるが，本日はその進捗状況について報告する。

この間，教育委員の先生方には，整備地である旧立命館中学・高校の施設の視察（平成 2 5 年 1 2 月 1 9 日）いただくとともに，学校の基本構想（平成 2 6 年 7 月 2 4 日）や施設整備（平成 2 6 年 9 月 1 8 日）の検討状況について説明したが，去る 1 0 月には中学校教員向けの説明会や地域住民に対象とする説明会を実施したところであり，その中でいただいた意見や要望も踏まえながら，魅力ある学校づくりに努めているところである。

また，今月 6 日には，開校時に高校 1 年生となる中学校 2 年の生徒・保護者を対象とする

学校説明会・ものづくり体験会を実施するが、参加者は生徒・保護者合わせて約400名の申込みがあるなど、新校に対する高い関心と期待を感じているところである。

まず、校名検討の状況についてであるが、両校と両校同窓会との協議により、外部有識者を含む、両校学校長と両校同窓会役員、中学校長会代表で構成する「校名検討委員会」が先月11月に設置され、同月に開催された。

第1回会議においては、「市民公募を軸に校名候補案の選定を進めること」と「校名検討の観点」について確認されました。そして、今月中旬から1ヶ月程度の公募を実施したいと考えている。

その後、校名候補の選定に当たっては、応募のあった校名をそのまま採用せずに、一部の活用や複数の合成なども含めた形で、検討委員会で協議を行い、今年度中を目途に候補案が選定される見込みである。

募集チラシについては、新校のリーフレットとともに、両校・同窓会関係者はもとより、市役所・区役所・市教育施設に配架し、またホームページにおいて掲載し、幅広く周知する予定である。

以下、資料等に基づき説明する。

(・生徒・保護者向けに作成したDVD(約7分間)を放送)

(・プレゼンテーションソフトを用いながら、「新しい工業高校」の教育目標や育てる生徒像、設置予定学科、STEM教育やプロジェクト工学などの特色ある教育活動、進路保障や部活動のあり方について説明)

(・制服のデザインサンプルを実際に用いた説明)

(委員からの主な意見)

○京都の伝統を大切にするような取組をもっと盛り込むべきではないか。

○大学や地域との連携の取組が重要だが、具体的な検討状況はどうか。

○校名公募にあたり「新しい工業高校」と記載すると応募する方も工業高校という名前を付す可能性が高い。本日の説明では従来の工業高校を一新するほどイメージが変わっており、記載方法は再検討してほしい。

○本市が全く新しい新設高校を設置するのだから、あえて「旧・立命館中学高等学校を活用して」という文言が必要か再検討してほしい。

○科学・技術・工学・数学を一体的に扱うSTEM教育の根底にはアートのAも必要ではないか。製品のデザインやものづくりの美学などを象徴する意味でもアート(A)を含めたASTEMという視点も意識してほしい。

○「理数工学科(仮称)」の専門学科の区分は「工業科」なのか。大学進学を目指す中で「工業科を併設している」強みはあるのか。

○プレゼンテーションでは新工業高校の新しい教育活動ばかりが前面に出ており、本来培うべき「基礎・基本」が伝わりにくいので工夫すべきである。

○教育目標について、「新工業高校で身に付けるべき力」と「大学や社会でこのような人になってほしいと願うビジョン」が一体的に記載されていて理解しづらいので整理した方がよい。

○文部科学省から検討段階で指導を受けるようなことはないか。

○制服のプロジェクトも良いアイデアであるが、施設や教育内容に関しても女子生徒にとっ

て魅力ある高校づくりを進めてほしい。

- 魅力ある教育活動が求められるが、京都ならではのベンチャー要素を盛り込むようなことは検討しているのか。
- 学校現場とともに、新工業高校で生徒たちが一生涯のキャリアビジョンを描けるような夢のある学校づくりを引き続き進めていただきたい。

(事務局)

- 京都の伝統工芸分野で染色や陶芸については銅駝美術工芸高校でコースを設けており、新工業高校でも各分野・領域において京都の伝統工芸を扱った内容を取り入れていく。
- 現在、金沢工業大学や産業能率大学と、アクティブラーニングに関する教員研修会で連携を行っている。また、洛陽工業高校と龍谷大学の協定は引き継ぎたい。現在、京都にある大学とどのような連携が可能か具体的な検討を進めている。
- 工業高校ありきではなく、工業高校をベースとした全く新しい高校を創設するという視点で公募チラシを再考する。
- まちづくり領域、ものづくり領域ともに根底にはデザインや芸術の要素は不可欠であることは認識しており、教育活動全体を通してアートを意識していきたい。
- 「理数工学科（仮称）」は区分上あくまで「その他専門学科」である。ただし、工業科の「プロジェクト工学科」と共通で履修するコア科目を有しているという意味で他校の「その他専門学科」と異なる。また、机上の座学が中心となる理数系学科と異なり、「その他専門学科」の生徒であっても、高校段階からテクニカルステーション等でリアルな「ものづくり」「まちづくり」を身近に行えることが、研究開発者、技術者として大変な強みとなる。
- 今後、新工業高校の教育課程モデルをできるだけ早く具体化し、新工業高校で学ぶ「基礎・基本」はどのようなものなのか、またどのような教科や実習を具体的に展開するのかについて中学校現場や中学生・保護者にきちんと説明していきたい。
- 教育目標については中学生や保護者に伝わりやすいよう指摘を踏まえて再整理をしたい。
- 基本的に新工業高校は文部科学省の学習指導要領をもとに検討・具体化しており、特段指導を受けることは考えにくい。
- 社会における女性の活躍は目覚ましく、新工業高校においても女子生徒に多く入学してもらい学校の活性化を図るとともに、社会で活躍する人材育成を目指したい。中学校現場の応援もいただいているが、ハード・ソフト両面から従来の工業高校のイメージを一新し、新工業高校で一生涯の重要なキャリアビジョンを描いてもらえるような学校としていきたい。
- 構想段階から京都機械金属中小企業青年連絡会の幹事の方に参加いただき、ベンチャー要素の重要性についてご意見をいただいている。例えば京都の中小企業の強みを最大限に生かすために誕生し、世界的にも注目を集める「京都試作ネット」と連携した教育活動なども検討してまいりたい。

「京都市立定時制単独高校」の検討に向けたプロジェクト会議の設置及び有識者会議の開催について

(事務局説明)

○畑 学校指導課担当課長

まず7月31日の教育委員会において議決いただいた「京都市立定時制単独高校の創設に関する基本方針」について、改めて説明する。

この方針の策定に先立ち、伏見工業夜間定時制は、働きながら学ぶ生徒が減少し、不登校経験のある生徒や発達障害等による特別な支援が必要な生徒、また高校を中退した生徒など、多様な生徒が入学している状況を踏まえ、将来の学校の在り方について検討してきた。

平成25年11月には「現在の場所で新しい学科を設置し、不登校・発達障害により集団生活に馴染めず全日制高校に行けない生徒が学び直し、社会的に自立していくための夜間定時制高校」の創設を求める要望書を教育長に提出された。

全国的にも、不登校経験や特別な支援が必要な生徒をはじめ、多様な学びの動機や学習歴を有する生徒たちが増加してきている状況や、また、同様にこうした状況にある、本市の夜間定時制でも少人数教育の徹底はもとより、3修制の導入、特別支援に関する専門的知識を有する教員の配置、また発達障害に関する文部科学省の研究指定の取組など様々な改革を進めてきたところである。

教育委員会としてもこうした現状や課題、また伏見工業からの要望も十分に踏まえ、新しい「定時制単独校」の創設を目指す基本方針を定めたところである。

この基本方針における「検討の進め方」では、両校教職員と教育委員会職員で構成するプロジェクトを発足することとされるとともに、学識経験者や中学校現場等の参画の機会を設けることが定められており、現在の状況について本日報告をする。

プロジェクトの構成は、両校の校長、副校長、代表教員2名、そして教育委員会職員3名の計11名であり、プロジェクトを発足した10月30日の第1回プロジェクト会議では改めて両校の現状について共通認識を深め、11月25日の第2回会議で新校に求められる役割や少人数教育のあり方について議論をスタートした。

本プロジェクトは原則として月1回を目標に開催していくが、プロジェクトの検討内容に対して様々な立場の有識者から指導助言をいただく機会を3回程度は設けたいと考えており、その1回目を12月19日に開催する運びとなった。

発達障害の専門家である竹田契一氏、兵庫県にある不登校生徒を対象とした全寮制の生野学園中学校・高等学校学園長の宇都宮誠氏、本市の「子ども若者支援策」を担う京都市ユースサービス協会事業部長の水野篤夫氏、本市の定時制高校で勤務経験があり、大学で教育学を教えてこられた伊藤一雄氏、そして中学校現場の意見をいただくために中学校長会の代表として進路部会長の小野尚志氏にも参画いただく。

また、当日は議論の内容をオープンとするため市民をはじめどなたでも傍聴できるよう公開の形式で開催する。

今後とも、基本方針の検討の観点について十分に議論を重ねつつ、広く市民意見募集も行いながら最終まとめを行ってまいりたい。

(委員からの主な意見)

○校名については新しい工業高校と同様に全く新しいものを検討するのか。

○これまでの2回でどのような議論をしてきたのか。

○米国ではフレックスタイム制を導入のうえ、インターネットを活用した学習保障を行うな

ど「学び直し」に加えて「通い直し」に取り組む例もあると聞く。これを機に検討できないか。

- 府立清明高校を希望しているのはどのような生徒たちかを分析していくことも必要である。
- 中学校からの単なる進学先としての高校ということではなく、一生涯におけるキャリア教育の重要な3年間を担う学校づくりを行うという姿勢で検討を進めてほしい。
- 20歳を超えてから学びの必要性を認識し、学び直しを希望することとなった生徒も積極的に入学してもらい、生徒間で切磋琢磨していくことも大切である。
- 少人数教育の検討も必要であるが、卒業してから社会にしっかり適応していくための教育システムもしっかりと議論してほしい。
- 学校行事や部活動の活性化という観点から望ましい学校規模もしっかり検討してほしい。

(事務局)

- まだ新校の内容を検討している段階であるが、将来的には校名は全く新しいものを検討していくこととなる。
- 第1回目は両校の生徒たちの現状、また教育上の課題等について再確認をし、第2回目は新校に求められるニーズ、少人数教育のあり方、授業時間帯などについて議論を行った。
- 本市では「ふれあいの杜」、洛風中学校、洛友中学校、生徒指導課のハートアクセス事業など不登校状態にある生徒たちの支援を幅広く展開している。新校においても、こうしたノウハウも最大限生かし、いわゆる「引きこもり」状態にありつつも学びたいと願う生徒たちへの教育保障を具体的に検討してまいりたい。
- 府立清明高校については、募集定員を大きく上回る希望調査結果となっているが、どのような生徒たちが希望しているか中学校長会とも連携して分析していきたい。
- 様々な分野の有識者や中学校代表の意見も十分にお聴きし、新校での学んだ生徒たちがこの学校において生涯のキャリアビジョンを描けるような教育活動をしっかり具体化していきたい。
- 「学び直し」を求める入学生が周囲の生徒たちに良い刺激を与えていることも多く、新校でもそうした環境は大切にしていきたい。
- 新校では課題のある生徒たちが通学・学習しやすい「ゆとりある環境整備」を目指しつつ、きめ細かに学習保障していくための習熟度講座など少人数教育も必要であるが、もちろん最終的には社会的自立を目標としていくことが大切である。
- 卒業後に就職する生徒が多いという実態から、大多数の生徒たちにとっては最終学歴の学校となるという視点も踏まえ、学校行事や部活動など、仲間とともに有意義な学校生活が送れるような望ましい学校規模についてこれから議論していく。

(4) 閉会

11時40分、委員長が閉会を宣告。

署 名 委員長